

文具エッセイ2020

- 17.便利な文具にがっかり■
- 18.わたしの「文房具ブーム」■
- 19.書くことと文房具■

17. 便利な文房具にがっかり

小学生の頃から便利グッズマニアだった私は、小学四年生の頃に登場したあるメーカーの針のないホチキス製品に大変感動した。しかし当時の私からしたら約800円という値段は大金であり、手に入れることはできなかった。

時は過ぎ大学生になると、アルバイト先のカフェでレシートや書類を纏めるためにその製品が使用されていた。長年憧れていたこの針のないホチキスを初めて触りととても興奮したが、いざ使うとこんなものかと思ってしまった。確かに針が不要で便利ではあるが、なんせ強度がない。丁寧に扱わないと綴じたものがすぐ取れてしまうのだ。そもそもホチキスは一度に約百の針を入れることができる。となると、大量に綴るとしても針を入れ替える手間をとるか、取れてしまうリスクを背負うかというものである。

便利な文房具はたくさん出回っているが、自分の筆箱の中に入っているのはシンプルなシャープペンシルにボールペン、消しゴムである。“シンプルイズベスト”。長年使われるものは所謂普通と思われる文房具である気がする。

便利な文房具は新しい物であるが故に従来の物と勝手が異なることが多い。今まで慣れていた行動を変えることはなかなか面倒くさいもので、そうするくらいならとシンプルな文房具を使ってしまう。また、便利な文房具は値段が高いのである。通常のホチキスは現代なら百円ショップで買ってしまう。

このようなことから私は未だにシンプルな文房具を使っているが、かと言って文房具が全く進化していった訳ではない。例えば今では馴染みのボールペンだが、元々文字を書く道具といえば筆と墨であった。ホチキスが進化したほぼ最終型がああ針のいらぬホチキス製品だと思っていたが、最近針がいらぬ上に紙に穴を空けないホチキスというものが発売されているようだ。文房具はまだ進化の途中であり今後ボールペンのように我々の日常に根付く文房具も誕生するかもしれない。

18. わたしの「文房具ブーム」

私は、文房具を集めることが好きだ。そして、文房具店に行くことも好きだ。お店に行くと、特に買う必要も無いのに、じっくりと端から端まで棚を見てしまう。思い返してみれば、今までの私の人生の中ではいくつかの「文房具ブーム」があった。

まず最初に訪れたのは、「鉛筆ブーム」だった。これは小学校低学年の時である。私は小学一年生から中学一年生までスイミングスクールに通っており、毎週土曜日、スイミングの帰りに隣のショッピングモールに寄るのが習慣となっていた。そこでいつも勉強で必要な文房具を買っていたのである。特に、棚にたくさん並んでいるカラフルで、様々なキャラクターが描かれた鉛筆たちの中からお気に入りを見つけることは、私の毎週の楽しみであった。誰かに見せるわけでもないのに、じっくり時間をかけて、真剣に選び抜いていたのを覚えている。

次にやってきたのは「付箋ブーム」だ。これは確か小学校高学年から中学にかけての時期である。学校や塾で鉛筆ではなくシャープペンシルを使うようになった私が夢中になったのは、かわいらしいデザインの付箋を集めることだった。教科書に目印として貼ったり、ノートが目立たせたいところに貼ることで勉強へのモチベーションが上がったような気がした。また、友達と気に入った付箋を交換し合うのも好きだった。

そして最近はというと「マスキングテープ」にはまっている。これはもともと塗装用の粘着テープなのだが近年は文房具として人気が高まっている。色やデザインも様々で比較的安いのでついつい買ってしまう。使わなくても、デザインを眺めているだけで楽しいのである。

文房具は私にときめきを与えてくれるものだ。これからも、このときめきを求めて、文房具コレクションを増やしていこうと思う。

19. 書くことと文房具

私たちの言葉が、「話す」以外で伝わる形として、みなさんはまず何を思い浮かべるであろうか。ほとんどのみなさんが思いつくのは、「書く」ではないだろうか。

手紙で書いて相手に出したり、会って話すなど、様々な伝え方ができるなかで、直接に会う場合は、顔に出た表情や口ぶりによって気分が伝わり、それが言葉に力を添える。表情や口ぶりが言語に色彩を与えるというわけだ。しかし、手紙やポストカードを書くときには、相手にこちらの表情は見えない。では何によって気分を伝えることができるのだろうか。私の答えは“文房具”である。

今はものごとが高速に発展し、人々の生き方も変わっていく時代だ。SNSがひろがり、チャットは距離と時差をなくしていく。しかしそんな時代にも、ラブレターや年賀状のような手書きのものは変わらない。そこでは文字が心を伝える。心を入れて選んだ文房具と、心を入れた文字とが組み合わさり、それはまさに心を込めた逸品となる。

手帳もその産物だ。私の出身は中国で、「手帳」という概念は日本の番組で初めて知った。そして日本に来て、日本人が手帳をよく使い、ほぼみんなが持っていることに気づいた。中国人にはその慣習がないため、驚いた。中国にも日記はある。しかし日記と違って手帳は、毎日の空欄がちゃんと空けてあって、計画を埋めていく。やはり日本人の謹厳さは文具にも出ていると感服した。異なる日にシールやふせんで印をつけ、人生の絵本みたいにキラキラしている。こうして、ごく普通の毎日にも意味づけがされているのだ。

『文具に関する論考と企画：奈良女子大学文具ゼミ 2020』

〔2020年度「文化社会学演習」WEB版報告書〕 <https://bun-gu-narajo.org/>
